古写真や絵画で見る

仙台歴史散策

上巳（じょうし）の節句と雛（ひな）まつり

仙台市博物館　学芸企画室　鈴木　かおる

第15回（最終回）

三月三日というと、幼い頃雛人形を飾り、雛あられや甘酒を頂いて大人びた気分になったことを思い出します。江戸時代、幕府はこの日を「上巳の節句」として、五節句の一つとしました。寛永期（一六二四～四三）には、人形を飾って供え物をしたり、贈り物をやりとりしたりと、いわゆる「雛まつり」の形ができました。今回は、絵や記録を手掛かりに江戸時代の雛まつりの様子をみてみましょう。

千代田の大奥 雛拝見 楊洲周延画 明治29年（1896）
仙台市博物館蔵

女性の服装

江戸時代、将軍家や大名家では、女性が暮らす場所は「奥方（おくがた）」とし、政治向きの「表」と区別していました。上の絵は、江戸城の大奥の様子を、記録を基に明治になって描いたもので、女性たちが雛飾りを見物する場面です。中央にいる二人の女中を見ると、「紅」の着物を着ています。

伊達家には奥方の規定集が残っており、季節、儀式、職に応じて決まりがあったことが分かります。特に上巳の節句は、他の節句とは違い、着物の色を「紅」としています。伊達家の奥方でもこの日に、世継ぎの生母から上級女中の給仕に至るまで、皆で「紅」を着た華やかな様子が目に浮かびます。

雛飾り

この絵の左方には、豪華な雛段飾りがあり、最上段に二組の内裏雛（だいり）、一番下の段には雛調度が並んでいます。伊達家ではどうだったのでしょうか。

内裏雛については、明治時代の伊達家の所蔵品の目録に、「内裏雛壱（一）対」、「内裏雛拾（十）対」等とあり、複数組あったと分かります。これらの人形ではありませんが、蒔絵で飾った葵紋付きの豪華な雛調度一式が（左写真）、仙台市博物館に伝わっています。雛調度は他にもあったとされ、伊達家でも多くの人形や調度が並ぶ豪華な雛飾りであったと想像できます。

贈り物

さらに、藩主や奥方の贈答も欠かせませんでした。五代藩主伊達吉村の例を見てみます。吉村の娘、藤子の初節句には、将軍徳川家宣（いえのぶ）の正室、天英院（てんえいいん）から雛一対や造花、菓子を賜りました。別の年には、娘の徳子の嫁ぎ先の宇和島藩との間に、雛や菓子などの贈り物のやりとりがありました。また、普段の年でも、伊達家内で菓子盆や盃（さかずき）、肴（さかな）等が藩主から奥方に送られています。

生活様式の変化に伴って雛まつりの形も変わってきました。しかし春に桃の花が咲くころ、女児の健やかな成長を祈って、人形をまつり、供え物をし、宴（うたげ）を催すというその気持ちは、今日にも受け継がれているように思います。

竹菱葵紋蒔絵雛調度　仙台市博物館蔵

次号からは新コーナー「せんだいのスポーツむかし話」がスタートします。

企画展

仙台の美と出会う

—福島家三代の書画・工芸品コレクション—

4月24日（金）～6月7日（日）

明治から昭和にかけて仙台の経済界で活躍した福島家が収集し、のちに福島美術館によって保存・公開されてきた約3,000点の美術工芸品等の中から絵画や茶道具・やきものなど優品を紹介します。福島家の人々が郷土・仙台で出会い、愛した美の数々を楽しんでみませんか。

【観覧料】常設展料金でご覧いただけます。
一般・大学生460円（360円）、高校生230円（180円）、
小・中学生110円（90円）※（　）内は30名以上の団体料金。

（上）旭日に鶴図　東東洋筆　天保5年
（左）黒楽月萩図茶碗　銘「秋草残月」　三浦乾也作
いずれも社会福祉法人共生福祉会蔵

博物館は令和2年4月1日（水）から再開館いたします。

現在、館内設備改修工事のため休館しておりますが、4月1日（水）9時から再開館いたします。

再開館後は下記の常設展が始まります。ぜひご観覧ください。

旬の常設展2020春
「伊達政宗と家臣たち」ほか
4月1日（水）～6月21日（日）

仙台市博物館 SENDAI CITY MUSEUM　**TEL:022-225-3074**（休館中の電話受付時間　平日9:00～16:45）
〒980-0862 仙台市青葉区川内26番地〈仙台城三の丸跡〉▶ツイッター @sendai_shihaku　▶博物館HP　仙台市博物館　検索